歯肉に発生した疣贅型黄色腫の1例

松尾 朗・高森 等・横澤 茂
内田 稔・野中博子*・藤田裕紀*

A case of verruciform xanthoma of the gingiva

Akira MATSUO・Hitoshi TAKAMORI・Shigeru YOKOZAWA
Minoru UCHIDA・Hiroko NONAKA*・Hiroki FUJITA*

Abstract: Verruciform xanthoma is a rare lesion clinically manifested as a gum tumor with a papillary or granular surface. Histopathologically, it is characterized by extreme elongation of epithelial rete pegs and swollen foamy cells in the connective tissue between the rete pegs.

A case study is presented of verruciform xanthoma on the gingiva of the lower jaw of a 53-year-old male. The disease had been detected 15 years earlier.

Histopathological, immunochemical and electron microscopic findings are discussed. It is speculated that this lesion may be due to local chronic inflammation, with foamy cells being derived from histiocytes.

Key word: verruciform xanthoma (疣贅型黄色腫), gingiva (歯肉), foamy cells (泡沫細胞)

緒 言

黄色腫病変の1つである疣贅型黄色腫は歯肉あるいは歯槽粘膜に多く生じ、乳頭状もしくは疣贅状の増殖を示す。病理組織学的には均一に伸長した上皮の乳頭状増生と上皮脚間結合組織の泡沫細胞を特徴としている。

今回、われわれは、下顎歯肉部に発生した疣贅型黄色腫の1例を経験し、病理組織学的、免疫組織学的、透過電顕による検討を加えたので、その概要について報告する。

症 例

患 者：53歳 男性。
初 診：平成2年4月■日。

日本歯科大学歯学部口腔外科学教室第2講座
(主任：内田 稔教授)

* 日本歯科大学歯学部臨床検査室
(室長：藤田裕紀)

The Nippon Dental University, School of Dentistry at Tokyo, Department of Oral and Maxillofacial Surgery II (Chief: Prof. Minoru Uchida)

* The Nippon Dental University, School of Dentistry at Tokyo, Section of Clinical Laboratory (Hiroki Fujita)

受付日：平成4年9月20日

主 訴：下顎左側犬歯頬側歯肉部の膨隆。

家族および既往歴：特記すべき事項はない。

現病歴：約15年前に下顎左側犬歯頬側歯肉部の無痛性膨隆に気づいた。膨隆は初めの5年間は徐々に増大したが、その後、現在にいたるまでの10年間はほとんど変化がないため放置していた。最近、他部位の治療のため某歯科医院を受診したところ、同部の精査を勧められ紹介、来院した。

現 症：13頰側の歯頸部付近に大きさ約7×3mmの境界比較的明瞭な膨隆を認めた。表面は顆粒状、帯黄色で弾性軟であった。134歯冠部は特に異常はなく、骨植も堅固であったが、同部の歯肉には軽度の炎症が認められた。(写真1)。なお、全身の他の部分に同様の腫瘍などは存在しなかった。

処置および経過：平成4年4月■日、乳頭腫を疑い、腫瘍を骨膜を含め一塊として切除した。現在、術後約2年を経過したが再発もなく経過は良好である。

病理組織学的所見：H-E染色では、表層の重層扁平上皮は軽度の鈍角化と棘細胞の増生を示し、上皮脚の延長を認めた。上皮脚間および上皮脚下の結合組織内に広範囲にわたって泡沫細胞の集簇を認めた。泡沫細胞は小型の核とエオジンに淡染するレース状の胞体を有し、それより深部には軽度の炎症性細胞の浸潤を認めた。しかし、Touton型巨細胞はみられなかった(写真2)。

免疫組織学的所見：CD-68, lysozyme HLA-DR で

写真1 初診時口腔内写真

写真3 透過電顕像 (×5,000)

写真2 病理組織像

は泡沫細胞内に陽性所見を認めたが、S-100 蛋白、 α_1 -antitrypsin では陰性であった。

透過電顕所見：泡沫細胞内には拡張したミトコンドリアや粗面小胞体、細胞変性物とともに限界膜に囲まれた電子密度の低い脂肪滴を多数認めた(写真3)。

病理組織学的診断：疣贅型黄色腫。

考 察

疣贅型黄色腫は1971年 Shafer¹⁾により初めて報告され、われわれが渉猟した範囲では現在までに201例報告されている比較的古まれな疾患である。

臨床症状の特徴としては無痛性で増大傾向があまりみられない。そのため、自覚しても処置を受けるまでの期間は平均4年位である。なかには Nowparast²⁾の30年の経過例や、本邦では坂下³⁾の20年経過例もあり、本例の15年の経過を考えてもその発育は緩慢なようである。

病理組織学的特徴について、Shafer¹⁾は比較的均一に伸長した重層扁平上皮の乳頭状増生と上皮脚間の結合組織内の泡沫細胞の集簇をあげている。そして、この泡沫細胞は通常、上皮脚下の結合組織内には集簇しないと述

べている。一方、岸本⁴⁾は皮膚に発生した疣贅型黄色腫では上皮脚下に泡沫細胞が集簇する機会が多いとし、泡沫細胞の集簇範囲の程度が本症の発生部位に関連するとしている。しかし、口腔内に発生した疣贅型黄色腫にも上皮脚下まで泡沫細胞が集簇する機会があるとする Nowparast²⁾、佐藤⁵⁾の報告もあり、岸本⁴⁾のいうような泡沫細胞の集簇範囲と発生部位との関連は考えにくい。しかし、本例を含めなぜ上皮脚間の他に上皮脚下にも泡沫細胞が集簇するかいまだ不明な点が多く、さらに検討する必要がある。

全身的にみた場合、黄色腫病変は脂質代謝異常の有無によって高脂血症性黄色腫と正脂血症性黄色腫に分類され、疣贅型黄色腫は後者に属する。高脂血症性黄色腫の成因は組織球が血中の過剰な脂肪を除去するため内部に脂肪を蓄積し泡沫細胞が形成されるためであり、正脂血症性黄色腫では、組織球が腫瘍性または肉芽腫性に増殖し泡沫細胞を形成すると森嶋⁶⁾は述べている。しかし通常、泡沫細胞が腫瘍性か否か形態学的に区別することは困難である。その点について竹下⁷⁾は電顕所見から泡沫細胞中の空泡は高脂血症性黄色腫と同一であり、構造的に脂肪蓄積細胞にみられる脂肪小胞と一致すると述べている。本例も電顕所見が竹下⁷⁾と一致し、10年間も増殖傾向なく経過しており、本症が腫瘍性とは考えにくい。この泡沫細胞が腫瘍以外で局所的に増殖する原因としては Cobb⁸⁾らは外傷や炎症に対する組織球の反応ではないかと考えている。本例も泡沫細胞が、免疫組織学的な検討で CD-68, HLA-DR など組織球のマーカーに陽性であったことから、組織球の反応と考えられた。さらに、Watanabe⁹⁾は組織球を lysozyme, S-100 蛋白, NCA の抗原性の違いにより monocyte-macrophage 系と T-zone histiocyte 系の2種に分けている。本例は泡沫細胞が lysozyme で陽性、S-100 蛋白で陰性であることから monocyte-macrophage 系の組織球と考えられた。本例を含め疣贅型黄色腫は病変周囲に歯肉炎や義歯の不適合など慢性炎症があったとする報告が多いことから、われわれは、本症が慢性炎症による刺激から局所に脂肪代謝異常を起こし、それに対する組織球の反応から泡沫細胞が形成されたものとする。

結 語

われわれは53歳男性の下顎歯肉に発生した疣贅型黄色腫1例を経験した。病理組織学的、免疫組織学的、電顕による検討を加えた結果、本症の特徴である上皮脚間や上皮脚下にみられる泡沫細胞は、慢性炎症の刺激によって誘発された組織球の反応により生じたものと考える。

本論文の要旨は第45回日本口腔科学会総会（1991年5月17日京都市）にて発表した。

引 用 文 献

- 1) Shafer, W.G.: Verruciform Xanthoma. Oral Surg 31: 784-789 1971.
- 2) Nowparast B., Howell, F.V., et al.: Verruciform xanthoma. A clinicopathologic review and report of fifty-four cases. Oral Surg 51: 619-625 1981.
- 3) 坂下英明, 玉井 健三: Verruciform xanthoma の1例とその文献的考察. 日口外誌 29: 1047-1051 1983.
- 4) 岸本三郎, 小石和夫, 他: 頭部に生じた Verruciform xanthoma. 臨皮 41: 759-799 1987.
- 5) 佐藤 徹, 水上良二, 他: 下顎歯肉に発生した疣贅型黄色腫の2症例. 日口外誌 35: 2115-2120 1989.
- 6) 森嶋隆文, 清村妙子, 他: 皮膚黄色腫および類縁疾患. 病理と臨床 2: 73-81 1984.
- 7) 竹下信義, 佐藤方信, 他: Verruciform xanthoma の1症例, 一とくに光顕的ならびに電顕的検討一. 岩医大歯誌 4: 34-38 1979.
- 8) Cobb, C.M., Holt, R., et al.: Ultrastructural features of the verruciform xanthoma. J Oral Path 5: 42-51 1976.
- 9) Watanabe, S., Nakajima T., et al.: Malignant histiocytosis and Letterer-Siwe disease, Neoplasma of T-zone histiocyte with S-100 protein. Cancer 51: 1412-1424 1983.